



# 青山教会会報

「神の前での豊かさ」

創世記二章七節  
ルカによる福音書十二章十三〜二十一節

牧師 増田将平

「先生、私にも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」

群衆の一人が突然言いました。兄を説得する方法を考えていたのでしょうか。すると主イエスはたとえ話を語り始めました。主題は「貪欲」です。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」と主イエスは言われます。十戒の最後の言葉は「隣人の家を欲しがってはならない」であり、貪欲を戒めています。

けれども彼が求めているのは父の遺産なのです。兄の貪欲のために当然の分け前をもらえないから困っているのであり、

この人には「貪欲」は関係ないように思われます。

なぜ主イエスはこのたとえ話をなさったのでしょうか。欲しがることの何がいけないのでしょうか。欲求それ自体が罪であるという話ではありません。何かを求めて得ること、豊かになること自体が悪いわけではありません。

ただ、それらの欲がいつのまにか大きく膨らみ始めて貪欲となることがあります。だからこそ主イエスは「注意を払い、用心しなさい」と言われます。人ではなく自分に「注意しなさい」というのです。

「用心する」という言葉は「羊の群れの番をする」という言葉で、羊飼いが迷子の羊が出ないように、狼が襲ってこないように自分の心を見張っている姿を想像します。

たとえ話で登場する人は豊作によって大金持ちになりました。彼は自分に語りかけます。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」。新しい共同訳の聖書では「自分の魂に言ってやるのだ」と訳されています。元の言葉にはこの箇所「私の」という言葉が四回も記されています。「私の」という言

葉がこの人の生き方をよく表しています。自分のために獲得したものは自分のためだけに用いる。それが彼のライフスタイルです。だから自らの魂に語りかけているのです。財産によって自分の魂を保つことができると思っています。これだけ蓄えがあれば安心だ、と自分に言い聞かせています。なんとか安心したい。落ち着きたい。自分の命を守りたいからです。もしかすると本人もはつきりと自覚していない不安があるのではないでしょうか。やがていつかは失われるものに自分がよりますがっていることを気づいていたのかもしれないかもしれません。それゆえ不安を打ち消すために自分に言い聞かせていたのかもしれないかもしれません。

この金持ちには不正を行ったわけでも、人の物を盗んだわけでもありません。この世的に言えばすべてを手に入れた人でした。この人の何が「愚か」なのでしょう。賢く注意深く、慎重な人だからこそ金持ちになれたのかもしれないのです。ここでの「愚か」とは自分のことしか頭にないこと、私は私の力で豊かになれると考えたこと、神の前での豊かさについては何も考えようとしなかったこと、それが彼の愚かさだと主イエスは言われます。

創世記の聖書箇所は神が私どもに息吹を吹き込まれたことを記しています。私どもの魂は神によって与えられたのです。聖書によると私どもの命も、持ち物もすべては神から与えられ、神から預かっているものです。神のものを自分のものにしてしまうと、そのところに彼の食欲があります。

「人の命は財産によってどうすることもできない」と主イエスは言われました。私たちは持ち物によって自分の命を左右することができると思っています。これを持てば私の命は豊かになれると思いません。ある時はあれを手に入れることができなければ私は豊かになれないと思ひ込みます。しかし主イエスは「持ち物によらない命」があることを私どもに告げています。

この後に続いて語られる有名な言葉があります。「だから命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようか思い悩むな」。兄弟との遺産の配分で思い悩んでいた人もこの言葉を聞いたのです。「あなたがたのうち、誰が思い悩んだところで自分の命をわずかでも延ばすことができようか」。願い通りに遺産を手にしたらあなたは自分の命をどのようにして豊かにす

るのか。その命を支配しているのは誰なのかと問いかけます。

主イエスは天に属するお方であり、すべてにおいて豊かに富むお方でしたが、貧しい者となられたことを聖書は語りまします。神であるお方が、人となられました。主イエスの生涯は貧しさの極みから始まった生涯でした。赤子の主イエスが寝かせられたのは家畜小屋の飼葉桶でした。最初だけではありません。主イエスは家も土地も持たず、十字架で命を奪われる時唯一の持ち物であった上着をローマ兵がくじを引いて分け合いました。最後はご自分の命を自らすすんで手放されました。主イエスが全生涯を通して貧しくなられたのは、ご自身の豊かさによって私どもを豊かにするためです。

私どもの命と私どもが手にしているものすべてを主なる神にお返しする時が来ます。それらは神さまのものだからです。しかし主イエスは言われます。「恐れるな、あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」

神の国とは、神が私どもの全存在を治めてくださるといふことです。私どものために貧しくなってくださった主イエスは、私どもにご自身の命を与えてくださ

る。そして、死に打ち勝つ命を与えてくださるのです。

ある神学者は言いました。

「私どもは何かを自分のものにしなればならないという必要はありません。私どものために与えられているものをいただくことが許されているのです。私どもは自分の手をポケットの中に突っ込んだりする代わりに、握りこぶしを開いて、

神の前に差し出しさえすれば良いのです」  
聖書には「守銭奴」と言う言葉がびつたりな、食欲の虜になって生きていた金持ちが登場します。彼の名はザアカイです。彼は主イエスに出会おうと、だれに言われたのでもなく、自ら申し出ます。「私は財産の半分を貧しい人々に施します」。それまで自分のためだけに生きてきた人が、分け与える人になったのです。主イエスのくださる豊かさに満たされる喜びを知ったからです。すると人は誰でも神の前での豊かさを生き始めるようになるのです。

(七月十四日礼拝説教要旨)